



Hideyuki Igarashi

## ラグビー界で40歳までプロとして活躍した男

最後までアマチュアリズムにこだわってきた国際ラグビーボードがプロ化を容認して久しいが、その流れを汲んで、プロ選手も認めてスタートした国内のトップリーグも、03年から5シーズンを戦った。

当初、ラグビーのプロ化に難色を示していた企業が懸念していたのは、プロになった選手たちの年俵が高騰し、チーム運営が難しくなるのではないかとことだった。

ところがふたを開けてみれば、ほとんどの選手たちがプロにならなかった。それどころか、積極的にアマチュアの立場にとどまってプレーする選手たちが大半だった。

なぜか？ 大きなケガや故障の絶えないラグビーでは、いつプレーできなくなるとも限らない。肋骨の骨折くらいは当たり前。手足、特に膝のケガは多く、骨折やじん帯損傷で、半年から場合によっては2シーズンくらい棒に振ることも珍しくない。会社員の立場でプレーし、引退後は社業に就くという考え方は賢明である。

そんなタフで厳しい環境の中で、プロとして40歳までプレーした男がいる。

村田亙。日本を代表するSH（スクラムハーフ）として、91年、95年、99年と3大会連続でW杯出場を果たす。東芝府中時代には、97年から日本選手権3連覇の原動力として活躍し、当時の東芝府中が標榜した「PからGO」（ペナルティーキックを選択せず、ボールを展開してトライを狙いに行く）という攻撃的なラグビーの基点となった。

その後99年、日本人初のプロ選手としてフランス1部リー

グBのアビロン・バイヨンヌと契約。デビュー戦でいきなり2トライを決め、地元ファンからも「WATA」の愛称で親しまれた。

フランスで2シーズンプレーした後、帰国し、ヤマハ発動機で活躍を続けた。03年、07年のW杯出場はかなわなかったが、それでも05年に37歳4か月で日本代表に復帰し、ラグビー史上最年長で国際試合を戦った。

身長172cm、体重75kg。ビジネスマンの中でも標準的な体格の村田の何が優れていたのか。

それはスピードと柔軟性。足の速さや肉体の若々しさはもちろんのことだが、早かったのはその判断であり、柔らかかったのはその思考だ。相手の隙を見つけるや自らの判断で走り込み、創造的なプレーを次々とくり出していく。ときにはその奔放なプレースタイルが組織的なラグビーにそぐわないと、代表で不遇をかこった時期もあったが、それでも村田が40歳まで現役でプレーしたということは、プロ化という激動の時代が彼の柔軟でスピードある生き方を求めていたということだろう。

「なんか、もがいていないと気が済まないというか、山あり谷ありっていうのが好きなんですよ」と、笑いながら自身の歩みを振り返る。

前例のない日本人第1号のプロ選手としてパイオニアの道を歩き、40歳で引退を表明するまで国内外で戦い続けてきた村田。そんな彼が後進をどう指導していくのか。そして何を伝えていくのか。その引退は寂しくもあり楽しみでもある。

PANA通信



引退セレモニーであいさつする村田選手。